

令和 4 年度

事業所名 : グループホーム田園 2階

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0370101875		
法人名	協栄テックス株式会社		
事業所名	グループホーム田園 2階		
所在地	〒020-0051 岩手県盛岡市下太田榊14-2		
自己評価作成日	令和4年10月29日	評価結果市町村受理日	令和5年1月24日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者一人一人の生活リズムに合わせ、塗り絵・編み物・パズル等レクを好みに合わせて行い、伸び伸びと生活して頂いている。日中は園内で体力低下予防に取り組み、毎日歩行運動や軽体操、踏み台昇降を行い、運動機能向上・筋力アップ、バランス感覚維持に努め、転倒予防を心掛けている。又、バランスの取れた食事を提供し、外気浴を行ったりして心身共に健康で安全・安心な生活を送れるよう支援している。コロナ禍の為、地域との交流、家族様との交流は制限されているが、そんな中でも毎月何かしらの行事を行い、皆様に楽しんでもらえ、求められるグループホームで有る事を目指している。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

閑静な新興住宅地にあり、児童・老人福祉センターや保育園が隣接している、これらの施設長と園長が運営推進会議の委員を引き受け、グループホーム利用者の見守りの役目を担っている。事業所が地域との関係構築に努めてきた結果、災害時にも地域の方々が利用者の見守りの役割を担うこととなっている。コロナ禍で思うように外での活動ができない中、利用者の身体機能や身体能力の維持・向上を図るため、日課としてホーム内での軽体操やカラオケ・合唱を取り入れているほか、レクリエーションのバリエーションを増やしたり、職員との飾りつけの共同制作などに工夫を凝らしたりして、健康で穏やかに生活を送れるよう支援に努めている。また、栄養管理がなされた献立表に基づいて、旬の食材や新鮮な刺身などを取り入れた食事を職員が三食とも調理し、利用者と職員が同じ食卓を囲んで一緒に楽しく食べている。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和4年11月16日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	園の理念は常に見える所に掲示していて、職員皆把握できるようにしている。共同生活の中で、各自生き生きと笑顔で生活できるよう、レクや行事を提供している。	前回の自己評価を踏まえ、目標達成計画を作成し、理念を共有する取組みを進めることとし、理念を廊下の掲示板へ掲示するとともに、全体会議でも話し合っている。利用者一人一人のちょっとした表情やしぐさ、身体上の変化をキャッチし、利用者が何を考え、どう捉えているのか確認し、反応を見るなどして、笑顔へとつながるよう、理念の実践に取り組んでいる。	目標達成計画では、理念に関する勉強会の開催などにも取り組むこととしていましたが、職員の入れ替わりが多く勉強会の時間が取れないことなどから実施されていません。勉強会の時間が取れないという事情があるものの、むしろ新人に対する勉強会の必要性は高いことから、理念に関する勉強会の開催と実践の場での職員指導にさらに取り組むことを期待します。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	本来であれば、地区の近所の誠文館学童クラブや下太田保育園の児童や園児と行事を通して交流したり、また町内会の行事に参加したりしていたが、コロナの影響で交流が図れない難しさがあった。	コロナ禍前は納涼祭に園児などを招待したり、町内会の清掃行事に参加したりしていたが、今は行事が中止となって交流が図れない。隣接する児童・老人福祉センターに人が集まったときに利用者が手を振っていたことがある。	町内会の回覧板に事業所を理解してもらう広報紙を挟んでもらうなどして、コロナ禍が続いている中であっても地域とのつながりが保てるよう取り組んでいくことを期待します。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	大宮中学校の職場体験を受け入れ、認知症の理解やグループホームの役割を知ってもらっていたが、コロナの為受け入れが出来なかった。盛岡市の小中学生職場体験受け入れにも登録しているが、やはりコロナ禍で受け入れできなかった。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	町内会長・民生委員・近隣保育園・福祉センター職員にも委員に加わって頂き、行事や日々の生活状況を報告したり、委員からは意見やアドバイスを頂く等している。防災でも適切なアドバイスを頂いている。(但し、ここ2年間はコロナ禍で書面開催となっている)	運営推進会議の委員は、地域包括支援センター職員、町内会長、保育園園長、児童・老人福祉センター長、民生委員、家族代表で構成されている。コロナ禍で会議は2カ月に1度の書面開催となっているが、書面報告についての意見を電話で必ず確認している。委員からは、コロナ禍対応への励ましの声が多い。また、昨年7月に参集しての会議を開催した際には、併せて避難訓練を実施し、委員にも実際に利用者の見守りを手伝ってもらい、意見をいただいている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	不明な点や疑問点は電話やメールで問い合わせる等している。また、難しい事例は包括支援センターの職員に相談したり助言を頂く等連携を図っている。	市の担当課との連絡はメールが主となっている。地域包括支援センターの担当者は運営推進会議のメンバーであり、事業所の状況報告とともに、適宜相談するなど連携を図っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	個人の意思を尊重し、危険がない限り自由にして頂き見守りをしている。玄関の施錠に関しては防犯上の理由から行っているが、季節の良い時期は玄関を開放し自由に入出しベンチで外気浴をして過ごしている。外出に関してはコロナ禍でもあり、行事ドライブ等で代替している。	身体拘束廃止に関する指針について半期ごとに全体会議で勉強会を行い、年1回職員同士で取組みの確認を行なっている。玄関の施錠は防犯上行なっているが、利用者が玄関のそばに来て外へ行きたいそぶりを見せる場合には、職員が開錠し一緒に外へ出ている。離床センサーは安全と誘導のため6名使用しているが、事前に家族の同意を得ている。また使用の報告を運営推進会議に行なっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員同士連携して、些細なことでも見逃さないよう情報共有している。また常に注意を払い、未然に防げるよう努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	必要なときは、担当者が市の職員と協力しながら対応している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約・解約に関しては十分な説明をするとともに疑問や不安等を伺い理解して頂き契約及び退去となっている。また、入居・退居後でも問い合わせに関しては丁寧に対応している。改定時は、書面で提示した上で問い合わせに関しては随時対応している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進協議会に家族代表に参加して頂き、助言・協力を頂いている。要望等あった際はすぐ対応している。その他にも、玄関にご意見箱を設置している。日々発せられる言葉から利用者の希望・要望を汲み取るようにしている。必要な場合はアンケート等を頂いている。	事業所の「田園だより」を年に4回、各利用者の様子を写真にしたものも年に4回、家族へ送付している。利用者の様子については写真のほかに、ADLや身体状況の変化についても記載するようにしている。コロナ禍で家族が直接来訪することがなくなり、直接意見を聞く機会が少なく、運営推進委員の家族の方に意見をもらうなどしている。	前回の外部評価を踏まえて作成した目標達成計画では、コロナ禍で面会制限がある中、利用者の様子を密に伝えるため、「田園だより」の発行回数と利用者の日常生活の様子を報告する回数を増やすこととしていましたが、未達成ですので、引き続き計画達成に向けて取り組まれることを期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	各委員会を設置し多面的な角度から話し合い全体会議にかけて反映している。また随時提案・意見を聞いて改善している。年度初めに職員個々に意見、要望を聞く機会を設けている。	全体会議の中で職員の意見を聞いているほか、必要があるときには職員個人が直接管理者に相談に来ている。また、無記名にて管理者への意見・要望を提出する機会があり、勤務希望のほか、利用者のことで気づいたことも提案されている。出された意見、要望については、運営に反映させるよう努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者を中心に職員が各々役割を持ち、よりやりがいや評価しやすい環境が作られている。また、講習会への参加や資格取得を積極的にバックアップしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	資格取得の為の研修等への参加に配慮した勤務体制とし、また資格取得後は会社既定の手当を支給している。園外研修参加者は後日園内勉強会で報告し職員全体に反映して。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍以前は、地域のいわて地域密着型サービス協会の会議や地域ケア会議などに参加したり、いわて地域密着型サービス協会主催の交換研修に参加していたが、現状コロナで開催もままならない為、交流が出来ていない状況である。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	申し込み時から事前面接の時などに本人の心配事や不安等を汲み取るよう努めている。また可能な限り見学に来ていただき雰囲気を感じてもらおう等、不安の解消に努めている。本人が困っている事などを傾聴し電話による問い合わせにも耳を傾けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族との関わりや現状を知り不安、要望を組みとり安心して頂けるよう支援に努める。又連絡時等に近況報告をし本人の想いとご家族の要望などを組みとりながらより良い関係性を築けるよう努めている。		

事業所名 : グループホーム田園 2階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	コロナ禍でご家族様との面会があまり出来ない状況ではあるが、連絡や相談を密にして、ご本人様に合ったサービスを提供している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	台所の手伝いや洗濯たたみ、食堂の床はき、ホールの手すり拭き等できる力にあった役割を分担し社会参加する事でお互いの信頼性を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍の影響で、以前は行っていたご家族様参加の行事がほとんどできなくなってしまった(敬老会、新年会等)。面会等も制限している期間が長く続いているが、少しでも近況を伝えようと、写真を印刷したりして送っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍の為面会等には制限がかかっているが、電話等には対応しており、ご本人様に出てもらっている。	コロナ禍のため、直接面会はできていないが、窓越しの面会を実施するようになった。家族や友人との電話を取り持ったり、事業所で年賀状を準備し、利用者の一言を添えて送ったりして、関係が途切れないよう支援に努めている。今年、お墓参りは1、2階の利用者で2人することができた。訪問理容師が定期的に来ているが、利用者との関係性を築くまでには至っていない。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	馴染みの利用者同士の交流に加え職員が仲介をすることで他の利用者が交わり関わりを築けるような支援。気の合いそうな方々であれば席を隣にしたりとかして、気軽に交流できるよう見守りしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後も家族にその後の様子をお伺いしたり心配事を傾聴している。又転居の際には情報を共有したり転居先に面会に行くなどをしている。		

事業所名 : グループホーム田園 2階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	何気ない言葉が本人の希望や要望であることが多く見逃さないようにしている。利用者との1対1の会話の場で心境や現状を察するよう努めている。些細なことでも職員間で情報を共有し共通した支援に努めている。	言葉での意思疎通が困難な利用者については、表情の変化を見落とさないようにし、「どうしたの？」などの問いかけをして意向を理解するよう努めている。また1対1の会話を大切に、他者と離れてソファや長椅子に座ってじっくり聞くようにしている。そこで気づいたことなどは申し送りノートあるいは口頭で職員間で共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	事前訪問で情報収集し、入居前の生活の様子情報を家族、担当ケアマネ、施設職員から伺い日常の会話や手伝いなどの行動から生活歴を把握するようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	週間トータルチェック表をもとに排泄、入浴、食事量、心身の状態を把握し、職員間で共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の心身の状態観察を行い、職員間での報告・連絡・相談を行っている。3か月ごとのケア会議を通して介護計画を作成している。状態変化時にはご家族様に連絡を行っています。	介護計画に基づき支援している中でモニタリングを行ない、気づいた点を申し送りノートに記載し、3か月に1度あるいは変化が見られた時点で全員でそのデータを共有し、ケア会議で改善案を検討している。その改善案を家族に相談し、利用者にとって望ましい介護計画の変更へと繋げている。介護計画の見直しは6か月に1度、ケア会議の開催は3か月に1度を基本にしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	業務日誌、介護支援経過の記録にて本人の日々の変化を記録し都度対応している。申し送りノートを活用し情報の共有に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	一人一人に合ったサービスの提供を心掛け、本人・家族の希望に沿ったサービスの提供に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍の為、児童・園児の納涼祭へのご招待や、地区のお祭りに参加する等、行事を通して入居者と地域の交流は自粛している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	病状の経過、家族の思いを受け止めそれぞれのかかりつけ医に受診して頂いたり、あるいはこちらで受診している。必要な場合は訪問診療対応をしている。また緊急時には、盛岡市消防署へ救急搬送を依頼している。	入居前のかかりつけ医の利用者がおよそ1/3で、他の利用者は事業所の協力医を受診している。歯科は訪問診療を利用している。入居前からのかかりつけ医への受診には家族が付き添うことを基本とし、協力医への受診には職員が付き添っている。受診後に、薬の変更があった場合には、事業所と家族間が電話等で連絡し、情報を共有している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	変化時には責任者に報告し指導の下協力医の指示を受けている。些細な変化を見逃さず早期発見に努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時は、安心して治療に専念できるよう、病院関係者との情報交換に努めている。入院時情報提供書を提出し、早期に退院できるように関係作りを行っている。(コロナ禍ではあるが、主治医の了承により面会も可能なケースもあった。)		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重要事項説明書にて指針を作成している。本人の意思を最大限に尊重し医師により終末期と判断され時、家族、医師、田園担当者会議にて本人に一番良い方向を検討している。又終末期の対応についてご家族の意向を把握し方針を職員と共有しながら日常生活を継続している。	入居時に重要事項説明書の中の「看取り指針」を説明し、重度化した場合や終末期の状態になったときには、利用者・家族と話し合いを行ない、希望に沿う対応を行なうことにしている。実際にはこれまで看取りの事例はなく、重症化や終末期の状態になった場合には、家族と相談の上、協力医の指示のもと入院あるいは介護老人福祉施設へ転院している。	

事業所名 : グループホーム田園 2階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応について園のマニュアルを作り掲示し職員間で共有している。又定期的な勉強会を行っている		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	運営推進会議委員の皆様から災害時に協力頂けるよう依頼し了承を得ている。本来であれば夜間想定避難訓練を年に2回行うがコロナ禍で現状難しい状況。但し自主防災訓練は行っている。毎月防災点検・9月の防災週間には防災備蓄品の点検を行っている。	自主防災訓練を年2回行なっている。事業所のある地域は浸水危険地域となっており、水害時には2階への垂直避難としている。火災時は、2階の利用者はまずは踊場へ、1階の利用者は各部屋から外への水平避難としている。防災備蓄として、水・米・乾麺・缶詰などの食料や懐中電灯・ヘッドライト・電池など用意している。また軽油の非常用発電機を設置し、停電時には自動で切り替わるようになっている。災害時の地域の協力体制が築かれており、5名の運営推進委員がかけつけ、玄関前に退避している利用者の見守りをしてもらえるようお願いしている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人の性格・特徴を重んじて声かけ・見守りをしている。その方の尊厳を重視し、穏やかに日々を過ごして頂けるよう心掛けている。	利用者の尊厳を重視し、利用者のやりたいことを尊重するとともに、これまでの長年の習慣をホームでも再現できるよう、それぞれの人生を踏まえた関わりを心掛けている。プライバシーを確保するため、トイレ誘導時の声掛けや、ドアを閉めて側での見守りなど、安全と羞恥心への配慮に気を付けている。また居室に入るときは必ずドアをノックしたり、空気の入れ替えでドアを開けたままの時にはのれんをかけ、室内が見えないようにしたりしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	コロナ禍で外出が思うように出来ないの、園内で自由歩行をしたり、室内で過ごす等、本人の意思を尊重している。自身の居場所・危険が伴わない行動・自己決定を尊重している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人のペースで過ごしていただけるようにしている。体調等を考慮・危険がある場合を除き本人の想いに添えるよう努めている。		

令和 4 年度

事業所名 : グループホーム田園 2階

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	定期的に爪切り、福祉床屋の利用をしている。ご家族様からご本人の衣類を持って来て頂き、ご自身の好みの服を着てもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節に合った旬の食材を使い食事の前に調理者による食事内容の説明をしている。お好みにより調理法を変えたり代用品を提供している。準備はできるところは一緒に行き食器拭き、テーブル拭きなどの片づけは当番を決め職員と一緒にしている。	献立は本部のメニューソフトで1年分作成されているが、これに基づいて各事業所で食材を調達し、旬の物や時には新鮮な刺身も取り入れた食事を職員が調理して提供している。利用者の希望により献立を変更するなど柔軟に対応している。食事は利用者と職員が同じ食卓を囲んで楽しく食べている。利用者は、ゴマすりなど得意なことを手伝ったり、食後の後片付けも食器やテーブル拭きを職員と一緒にしている。食欲をそそるために見栄え、色、配置、盛り付けを大事にしており、季節を感じる行事食は毎月のようにあり、利用者の楽しみとなっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	好みに合わない食材がメニューにある時は盛り付けの工夫や調理法を変える等対応している。水分を摂らない方にはゼリーや果物等好みの物を提供している。嚥下の難しい方には飲み込み易く工夫しロミ剤を活用している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後声掛けや誘導で歯磨きをしている。必要な方にはブラッシングを提供している。また、状況に応じ 歯科の訪問診療を受けている。夜間帯は義歯を洗浄剤に浸け清潔保持に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	自立度の高い利用者様には定期的な声掛け、介助が必要な利用者様には定期的な誘導をしている。いずれも排泄チェック表を記録し汚染の軽減ができるよう支援している。	自立度の高い布パンツの利用者は20%程度、他の利用者はリハビリパンツを使用している。安全とトイレ誘導の理由から家族の同意を得て、離床センサーを現在6人が使用している。排泄チェック表に記録し、そこから排泄パターンを把握し、定期的に声掛け誘導するようにしている。排泄誘導の際には、耳元でささやき、他人に気づかれないうようにしている。また排便間隔を把握し、便秘の利用者にはかかりつけ医の指示に従い便秘薬を投与している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	軽体操と歩行運動は日課となっており水分補給、繊維質の多い食品の摂取は工夫している。便秘薬の必要な利用者には主治医と連携し適切な便秘薬を処方して頂いている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	一人一人の様子や状況を見ながら、声かけ誘導し、入浴介助している。拒否のある方もいるが、意向に沿った声かけをしながら納得して入浴してもらっている。	基本的には、週2日、時間帯は午前が1階の利用者、午後が2階の利用者となっているが、利用者の希望を取り入れ臨機応変に入浴してもらっている。入浴を嫌がる利用者には日を変え人を変えながら声掛けをし、入浴してもらっている。着替えが面倒なことが入浴をしたがらない理由のようであるが、浴槽の中では気持ち良さそうにしている。菖蒲湯、ゆず湯などで楽しんでもらっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夕食後のテレビ視聴や馴染みの利用者様方の団欒で安心して就寝できるような時間を持っている。又何回も同じ事を確認される利用者様の訴えは傾聴したり安心して声がけて安眠できるよう工夫している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者一人一人の病気を把握しお薬説明書を参考に職員間共有している。服薬介助時は服薬確認シートを活用し誤与薬のないよう努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個人の生活歴を大切にできる事はやっていただいている。食器拭き、床はき、居室のモップがけ洗濯物干し、たたみ等できるところを進んでやっていただいている。季節行事の飾りつけや準備など楽しみながら行う事で社会参加になっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	現在は、コロナ禍の為外出を自粛しているが、天気の良い日は短時間ではあるが玄関先にベンチを出して日光浴をして、外の景色を眺めたり、季節の移ろいを感じてもらったりしている。	コロナ禍で日常的な外出は控えているが、天気の良い日には玄関先にベンチを出し、外の空気を吸ってもらい、気分転換を図るようにしている。また、4月に御所湖のお花見にドライブに出かけた。前回の自己評価を踏まえ、目標達成計画を作成し、外出に代わって、室内でのレクリエーションのバリエーションを増やしたり、職員との共同による室内装飾の制作や得点を競うゲーム大会の開催などに取り組んでいる。	コロナ禍で人と接するような場所への外出の自粛はやむを得ませんが、事業所周辺は日中車や人通りがほぼないことから、少しの時間でもよいので、人がいないことを確認した上で散歩を試みることを期待します。

令和 4 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム田園 2階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在、ご自分で管理されている方はいらっしゃいませんが、希望があればご家族様に確認を取って対応しています。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	毎年お手製の年賀状を送っている。郵便物や贈り物が届いた際は電話確認している。電話の要望があれば都度対応している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者と職員で協力して作成した季節の作品を飾り四季を感じられるよう工夫している。花壇には季節の花が咲くよう配慮しベンチで外気浴を楽しんでいる。玄関やベランダに季節の花を飾っている。廊下には行事の写真を飾り思い出づくりの工夫をしている。	共用のホールは広くゆったりとした空間で、そこにはゆっくりくつろげるソファや椅子が配置されている。また壁には季節感のある飾りつけなどがされており、玄関やベランダには季節の花があり、心が和む配慮がされている。環境美化委員会が設置されており、快適で居心地の良い環境であるよう工夫をこらしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ゆったりと座れるソファが4か所に設置しておりそれぞれに音楽を聴いたり外の景色を眺めたり利用者同士でお話ができるよう配慮している。少し離れた場所にもベンチや椅子を配置しており自由な空間を楽しんでいる		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に使い慣れたものを持参して頂けるようお伝えしている。いすやカーペットは転倒の危険がある場合は家族と相談しながら臨機応変に対応している。	居室には、電動ベッド、クローゼット、ヒーターが備え付けられている。利用者は、使い慣れたり、馴染みのある寝具、椅子・テーブル、衣装ケース、テレビや家族写真、位牌などを持ち込んで、自分らしい居心地の良い空間を作っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの場所が分かるように張り紙をしている。部屋の場所が分かるように「〇〇さんのお部屋です」と居室ドアに大きく表札をつけている。又近隣にカレンダーや飾り物を置き目印になるよう工夫している。		